

倫 敦 塔

夏 目 金 之 助

(10)

二年の留學中只一度倫敦塔を見物した事がある。其後再び行かうと思つた日もあるが止めにした。人から誘はれた事もあるが斷つた。一度で得た記憶を二返目に打壞はすのは惜い、三たび目に拭ひ去るのは尤も残念だ、塔の見物も一度に限ると思ふ。

行つたのも着後間もないうちの事である。其頃は方角もよく分らんし、地理杯は固より知らん、尤で御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出された様な心持ちであつた。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に歸れば瀛車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた、此響き此群集の中に二年住んで居たら吾が神経の纖維も遂には鍋の中の蕪海苔の如くべとくになるだらうとマクス、ノルダウの退化論を今更の如く大眞理と思ふ折さへあつた。

しかも余は他の日本人の如く紹介状を持つて世話になりに行く宛もなく又在留の舊知としては無論ない身の上であるから恐々ながら一枚の地圖を案内として毎日見物の爲め若くは用達の爲め出あるかねばならなかつた。無論瀛車へは乗ら

ない馬車へも乗れない、滅多な交通機關を利用仕様とすると、どこへ連れて行かれるか分らない。此廣い倫敦を蜘蛛手十字に往來する氣車も馬車も電氣鐵道も綱條鐵道も余には何等の便宜をも與へる事が出来なかつた。余は已を得ないから四角へ出る度に地圖を抜いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地圖で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡查を探す、巡查でゆかぬ時は又他の人に尋ねる、何人でも合點の行く人に出逢ふ迄は捕へては聞き呼び掛ては聞くかくして漸くわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのは恰も此方法に依らねば外出の出来ぬ時代の事と思ふ。來るに來所なく去るに去所を知らずと云ふと禪語めくが余はどの路を通つて「塔」に着したか又如何なる町を横つて吾家に歸つたか未だに判然しない。どう考へても思ひ出せぬ。只「塔」を見物した丈は慥かである。「塔」其物の光景は今でもあり／＼と眼に浮べる事が出来る。前はと問はれると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が會釋もなく明るい。恰も闇を裂く稻妻の眉に落ると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の燒點の様だ。倫敦塔の歴史は英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云ふ怪しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時の流れが逆

しまに戻つて古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬車、瀛車の中に取り残されたるは倫敦塔である。

此倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔て、眼の前に望んだとき、余は今の人が將た古への人かと思ふ迄我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初めとはいひながら物靜かな日である。空は灰汁桶を搔き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ懸つて居る。壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いて居るかと思はるゝ。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつ迄も同じ所に停つて居る様である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。只一人の船頭が艫に立つて居る。是も殆んど動かない。塔橋の欄干のあたりには白き影がちら／＼する。大方鷗であらう。見渡した處凡ての物が靜かである。物憂げに見える。眠つて居る、皆過去の感じてある。そうして其中に冷然と二十世紀を輕蔑する様に立つて居るのが倫敦塔である。瀛車も走れ電車も走れ、苟も歴史の有ん限りは我のみは斯くてあるべしと云はぬ許りに立つて居る。其偉大なるには今更の様に驚かれた。此建築を俗に塔と稱へて居るが塔と云ふは單に名前のみで實は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形狀はあるが、何れも陰氣な

灰色をして前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べてそうして其を虫眼鏡で覗いたら或は此塔に似たものは出來上りはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て抱和したる空氣の中にぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を吾が腦裏に描き出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ烟りの寐足らぬ夢の尾を曳く様に感ぜらるゝ暫くすると向ふ岸から長い手を出して余を引張るかと思はれて來た。今迄佇立して身動きもしなかつた余は急に川を渡つて塔に行き度なつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門迄馳せ着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は現世に浮游する此小鏡屑を吸収し了つた。門を入つて振り返つたとき

憂の國に行かんとするものは此門を潜れ。

永劫の呵責に遭はんとするものは此門をくぐれ。

迷惑の人と伍せんとするものは此門をくぐれ。

正義は高き主を動かさし、神威われを作る。

最上智、最初愛。我が前に物なし只無窮あり我は無窮に忍ぶものなり。

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

といふ句がどこぞに刻んではないかと思つた。余は此時既に常態を失つて居る。空濠にかけてある石橋を渡つて行くと向ふに一つの塔がある。是は丸形の石造で石油タンクの状をなして恰も巨人の門柱の如く左右に屹立して居る。其中間を連ねて居る建物の下を潜つて向へ抜ける。中塔とは此事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。眞鍮の楯、黒鍮の甲が野を蔽ふ。秋の陽炎の如く見えて、敵遠くより寄ると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て、逃れ出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の、君の政非なりとて蟻の如く塔下に押し寄せて、犇めき騒ぐときも亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした。鐘は今いづこへ行つたものやら、余が頭をあげて、鳶に古りたる櫓を見上げたときは寂然として既に百年の響を收めて居る。

又少し行くと右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス鐘が聳えて居る。逆賊門とは名前からが既に恐ろしい。古來から塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は皆舟から此門迄護送されたのである。彼等が舟を捨て、一度び此門を通過する

や否や娑婆の太陽は再び彼等を照さなかつた。テームスは彼等にとつての三途の川で此門は冥府に通ずる入口であつた。彼等は涙の浪に搖られて此洞窟の如く薄暗きアーチの下迄漕ぎ付けられる。口を開けて鰓を吸ふ鯨の待ち構へて居る所迄來るや否やキーと軋る音と共に厚樫の扉は彼等と浮世の光りとを長へに隔てる。彼等はいくして遂に宿命の鬼の餌食となる。明日食はれるか明後日食はれるか或は又十年の後に食はれるか鬼より外に知るものはない。此門に横付につく舟の中に坐して居る罪人の途中の心はどんなであつたらう。權がしむる時、雫が舟縁に滴たる時、漕ぐ人の手の動く時毎に吾が命を刻まるゝ様に思つたであらう。白き髯を胸迄垂れて寛やかに黒の法衣を纏へる人がよるめきながら舟から上る。是は大僧正克蘭マーである。青き頭巾を眉深に被り空色の絹の下に鎖り帷子をつけた立派な男はワイアットであらう。是は會釋もなく舷から飛び上る。はなやかな鳥の毛を帽に挿して黄金作りの太刀の柄に左の手を懸け、銀の留め金にて飾れる靴の爪先を、輕げに石段の上に移すのはローリーか。余は暗きアーチの下を覗いて、向ふ側には石段を洗ふ波の光の見えはせぬかと首を延ばした。水はない。逆賊門とテームス河とは堤防工事の竣功以來全く縁がなくなつた。幾多の罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔しの名残りに其裾を洗ふ笹波の音を聞く便りを失つ

た、只向ふ側に存する血塔の壁上に大なる鏡環が下がつて居るのみだ。昔しは舟の纜を此環に繋いだといふ。

左りへ折れて血塔の門に入る。今は昔し薔薇の亂に目に餘る多くの人を幽閉したのは此塔である。草の如く人を薙ぎ、鶏の如く人を潰し、乾鮭の如く屍を積んだのは此塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番の様な箱があつて、其側らに甲形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立つて居る。頗る眞面目な顔をして居るが、早く當番を済まして例の酒舗で一杯傾けて、一件にからかつて遊び度といふ人相である。塔の壁は不規則な石を疊み上げて厚く造つてあるから表面は決して滑ではない。所々に蔦がからんで居る。高い所に窓が見える。建物の大きいせいから下から見ると甚だ小さい。鐵の格子がはまつて居る様だ。番兵が石像の如く突立ちながら腹の中で情婦と巫山戯て居る傍らに、余は眉を攢め手をかざして此高窓を見上げて佇ずむ。格子を洩れて古代の色硝子に微かなる日陰がさし込んできらくと反射する。やがて烟の如き幕が開いて空想の舞臺がありくと見える。窓の内側は厚き戸帳が垂れて晝も月の暗い。窓に對する壁は漆喰も塗らぬ丸裸の石で隣りの室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切りが設けられて居る。只其眞中の六疊許りの場所は冴えぬ色のタペストリで蔽はれて居る。地は納戸色、模様は

薄き黄で、裸躰の女神の像と、像の周圍に一面に染め扱いた唐草である。石壁の横にも、大きな寐臺が横はる。厚樫の心も透れと、深く刻みつけたる葡萄と、葡萄の蔓と葡萄の葉が手足の觸るゝ場所丈光りを射返す。此寐臺の端に二人の小兒が見えて來た。一人は十三四、一人は十歳位と思はれる。幼なき方は床に腰をかけて、寢臺の柱に半ば身を倚たせ、力なき兩足をぶらりと下げて居る。右の肱を、傾けたる顔と共に前に出して年嵩なる人の肩に懸ける。年上なるは幼なき人の膝の上に金にて飾れる。大きな書物を開げて、其あけてある頁の上に右の手を置く。象牙を揉んで柔かにしたる如く美しい手である。二人とも烏の翼を欺く程の黒き上衣を着て居るが色が極めて白いので一段と目立つ。髪の色、眼の色、偕は眉根鼻付から衣裝の末に至る迄兩人共始んど同じ様に見えるのは兄弟だからであらう。

兄が優しく清らかな聲で膝の上なる書物を讀む。

「わが眼の前に、わが死ぬべき折の様を想ひ見る人こそ幸あれ。日毎夜毎に死なんと願へ。やがては神の前行くなる吾の何を恐るゝ……………」

弟は世に憐れなる聲にて「アーメン」と云ふ。折から遠くより吹く木枯しの高き塔を撼かして一度びは壁も落つる許りにゴーと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に顔をすり付ける。雪の如く白い蒲團の一部がほかど膨れ返る。兄は又讀み初める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思へ。夜ならば翌日ありと頼むな。覺悟をこそ尊べ。見苦しき死に様ぞ耻の極みなる。……………」

弟又「アーメン」と云ふ。其聲は顫へて居る。兄は靜かに書をふせて、かの小さき窓の方へ歩みよりて外の面を見様とする。窓が高くて脊が足りぬ。床凡を持つて來て其上につまだつ。百里をつゝむ黒霧の奥にぼんやりと冬の日が寫る。屠れる犬の生血にて染め抜いた様である。兄は「今日も亦斯うして暮れるのか」と弟を顧みる。弟は只「寒い」と答へる。命さへ助けて呉るゝなら伯父様に王の位を進ぜるものと兄が獨り言の様につぶやく。弟は「母様に逢ひたい」とのみ云ふ。此時向ふに掛つて居るタペストリに織り出してある女神の裸躰像が風もないのに二三度ふわり／＼と動く。忽然舞臺が廻る。見ると控門の前に一人の女が黒い喪服を着て悄然として立つて居る。面影は青白く凄れども居るが、どことなく品格のよい氣高い婦人である。やがて錠のきしる音がしてぎいと扉が開くと内から一人の男が出て來て恭しく婦人の前に禮をする。

「逢ふ事を許されてかと女が問ふ。

「否と氣の毒さうに男が答へる。逢はせまつらんと思へど、公けの掟なれば是非なしと諦め給へ。私の情賣るは安き間の事にてあれど」と急に口を緘みてあたりを見

渡す。濠の内から、かいつぶりがひよいと浮き上る。

女は頸に懸けたる金の鎖を解いて男に與へて、只束の間を垣間見んとの願なり。女人の頼み引き受けぬ君はつれなしと云ふ。

男は鎖りを指の先に巻きつけて思案の躰である。かいつぶりはふいと洗むや、ありていふ、牢守りは牢の掟を破りがたし。御子等は變る事なく、すこやかに月日を過させ給ふ。心安く覺して歸り給へと金の鎖りを押戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかりは敷石の上に落ちて鏘然と鳴る。

「如何にしても逢ふ事は叶はずや」と女が尋ねる。

「御氣の毒なれど」と牢守が云ひ放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云ひながら女はさめくと泣く。舞臺が又かわる。

文の高い黒装束の影が一つ中庭の隅にあらはれる。苔寒き石壁の中からスーと抜け出た様に思はれた。夜と霧との境に立つて朦朧とあたりを見廻す。暫くすると同じ黒装束の影が又一つ陰の底から湧いて出る。櫓の角に高くかゝる星影を仰いで、日は暮れたと脊の高いのが云ふ。晝の世界に顔は出せぬと一人が答へる。人殺しも多くしたが今日程寐覺の悪い事はまたとあるまいと高き影が低い方を向く。タ

ペストリの裏で二人の話しを立ち聞きした時は、いつその事止めて歸らうかと思ふた。と低いのが正直に云ふ、絞める時、花の様な唇がぴりりと顫ふた。透き通る様な額に紫色の筋が出た。あの唸つた聲がまだ耳に付いて居る。黒い影が再び黒い夜の中に吸ひ込まれる時、櫓の上で時計の音があんと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像の如く立つて居た番兵は銃を肩にしてコトリと敷石の上を歩いて居る。あるき乍ら一件と手を組んで散歩する時を夢みて居る。

血塔の下を抜けて向へ出ると奇麗な廣場がある。其真中が少し高い、其高い所に白塔がある。白塔は塔中の尤も古きもので昔しの天主である。竪二十間、横十八間、高さ十五間、壁の厚さ一丈五尺、四方に角樓が聳えて所々にはノーマン時代の銃眼さへ見える。千三百九十九年國民が三十三條の非を擧げてリチャード二世に讓位をせまつたのは此塔中である。僧侶、貴族、武士、法士の前に立つて彼が天下に向つて讓位を宣告したのは此塔中である。爾時讓りを受けたるヘンリーは起つて十字を額と胸に畫して云ふ、父と子と聖靈の名によつて我れ、ヘンリーは此大英國の王冠と御代とを、わが正しき血、恵みある神、親愛なる友の援を藉りて襲ぎ受くと。倍先王の運命は何人も知る者がなかつた。其死骸がポント、フラクト城より移されて聖ポール

寺に着した時、二萬の群集は彼の屍を繞つて其骨立せる面影に驚かされた。或は云ふ、八人の刺客がリチャードを取り卷いた時彼は一人の手より斧を奪ひて一人を斬り二人を倒した。去れどもエクストンが背後より下せる一撃の爲めに遂に恨を呑んで死なれたと。或る者は天を仰いで云ふ、あらず。リチャードは斷食をして自らと、命の根をたゝれたのぢやと。何れにしても難有くない。帝王の歴史は悲惨の歴史である。

階下の一室は昔しヲルター、ロリーが幽囚の際萬國史の草を記した所だと云ひ傳へられて居る。彼がエリザ式の半ヅボンに絹の靴下を膝頭で結んだ右足を左りの上へ乗せて鷲ペンの先を紙の上へ突いたまゝ、首を少し傾けて考へて居る所を想像して見た。然し其部屋は見る事が出来なかつた。

南側から入つて累旋狀の階段を上ると茲に有名な武器陳列場がある。時々手を入れるものと見えて皆びか／＼光つて居る。日本に居つたとき歴史や小説で御目にかゝる丈で一向要領を得なかつたものが一々明瞭になるのは甚だ嬉しい。然し嬉しいのは一時の事で今では丸で忘れて仕舞つたから矢張り同じ事だ。只猶記憶に残つて居るのが甲冑である。其中でも實に立派だと思つたのは慥かヘンリー六世の着用したものと覺えて居る。全躰が銅鍍製で所々に象嵌がある。尤も驚くのは

其偉大な事である。かゝる甲冑を着けたものは少なくとも身の丈七尺位の大男でなくてはならぬ。余が感服して此甲冑を眺めて居るとコトリ〜と足音がして余の傍へ歩いて来るものがある。振り向いて見るとピール、イーターである。ピール、イーターと云ふと始終牛でも食つて居る人の様に思はれるがそんなものではない。彼は倫敦塔の番人である。絹帽を潰した様な帽子を被つて美術學校の生徒の様な服を纏ふて居る。太い袖の先を括つて腰の所も帶でしめて居る。服にも模様がある。模様は蝦吏人の着る半纏について居る様な頗る單純の直線を並べて角形に組み合はしたものに過ぎぬ。彼は時として槍をさへ携へる事がある。穂の短かい柄の先に毛の下がつた三國誌にでも出さうな槍をもつ。其ピール、イーターの一人が余の後ろに止まつた。彼はあまり脊の高くない、肥り肉の白髯の多いピール、イーターであつた。あなたは日本人では有りませんか」と微笑しながら尋ねる。余は現今の英國人と話をして居る氣がしない。彼が三四百年の昔から一寸顔を出したか又は余が急に三四百年の古へを覗いた様な感じがする。余は黙して輕くうなづく。こちらへ來給へと云ふから尾いて行く。彼は指を以て日本製の古き具足を指して、見たかと云はぬ許りの眼付をする。余は又だまつてうなづく。是は蒙古よりチャーレス二世に献上になつたものだ」とピール、イーターが説明をして呉れる。余は三たびうなづく。

白塔を出てポーシャン塔に行く。途中に分捕の大砲が並べてある。其前の所が少しばかり鏡柵で圍ひ込んで鎖の一部に札が下がつて居る。見ると仕置場の跡とある。二年も三年も長いのは十年も日の通はぬ地下の暗室に押し込められたものが或る日突然地上に引き出さるゝかと思ふと地下よりも猶恐しき此場所へ只据えらるゝ爲めであつた。久しぶりに青天を見てやれ嬉しやと思ふ間もなく、目がくらんで物の色さへ定かには眸中に寫らぬ先に白き斧の刃がひらりと三尺の空を切る。流れる血は生きて居るうちから既に冷めたかつたであらう。鳥が一疋下りて居る。翼をすくめて黒い嘴をとがらせて人を見る。百年碧血の恨が凝つて化鳥の姿となつて長く此不吉な地を守る様な心地がする。吹く風に楡の木がざわ／＼と動く。見ると枝の上にも鳥が居る。暫くすると又一羽飛んでくる。何處から來たか分らぬ。傍に七つ許りの男の子を連れだ若い女が立つて鳥を眺めて居る。希臘風の鼻と珠を溶いた様にうるはしい目と眞白な頸筋を形づくる曲線のうねりとが少からず余の心を動かした。小供は女を見上げて「鴉が、鴉が」と珍らしさうに云ふ。それから「鴉が寒むさうだから、麴麴をやりたい」とねだる。女は靜かに「あの鴉は何にもたべたがつて居やしません」と云ふ。小供は「なぜ」と聞く。女は長い睫の奥に漾ふて居る様な眼

て鴉を見詰めながら、あの鴉は五羽居ますといつたぎり小供の間には答へない。何か獨りで考へて居るかと思はるゝ位濟して居る。余は此女と此鴉の間に何か不思議の因縁でもありはせぬかと疑つた。彼は鴉の氣分をわが事の如くに云ひ、三羽しか見えぬ鴉を五羽居ると斷言する。あやしき女を見捨てゝ余は獨りポーシヤン塔に入る。

倫敦塔の歴史はポーシヤン塔の歴史であつて、ポーシヤン塔の歴史は悲酸の歴史である。十四世紀の後半にエドワード三世の建立にかゝる此三層塔の一階室に入るものは其入るの瞬間に於て、百代の遺恨を結晶したる無數の紀念を周圍の壁上に認むるであらう。凡ての怨、凡ての憤、凡ての憂と悲みとは此怨、此憤、此憂と悲の極端より生ずる慰藉と共に九十一種の題辭となつて今に猶觀る者の心を寒からしめて居る。冷やかなる鍔筆に無情の壁を彫つてわが不運と定業とを天地の間に刻み付けたる人は、過去といふ底なし穴に葬られて、空しき文字のみいつ迄も娑婆の光りを見る。彼等は強ひて自らを愚弄するにあらずやと怪しまれる。世に反語といふがある。白といふて黒を意味し、小と唱へて大を思はしむ。凡ての反語のうち自ら知らずして後世に残す反語程猛烈なるはまたと有まい。墓碣と云ひ、紀念碑といひ、賞牌と云ひ、綬章と云ひ、此等が存在する限りは、空しき物質にありし世を忍ばし

ひるの具となるに過ぎない。われは去る、われを傳ふるものは残ると思ふは、去るわれを傷ましむる媒介物の残る意にて、われ其物の残る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思ふ。未來の世迄反語を傳へて泡沫の身を嘲る人のなす事と思ふ。余は死ぬ時に辭世も作るまい。死んだ後は墓碑も建てゝもらふまい。肉は焼き骨は粉にして西風の強く吹く日大空に向つて撒き散らしてもらはう。杯と入らざる取越苦勞をする。

題辭の書躰は固より一樣でない。あるものは閑に任せて叮嚀な楷書を用い、あるものは心急ぎてか口惜し紛れかがりく〜と壁を搔いて擲り書きに彫り付けてある。又あるものは自家の紋章を刻み込んで其中に古雅な文字をとめ、或は楯の形を描いて其内部に讀み難き句を残して居る。書躰の異なる様に言語も亦決して一様でない。英語は勿論の事、以太利語も羅旬語もある。左り側に、我が望は基督にありと刻されたのはバスリュとい坊様の句だ。此バスリュは千五百三十七年に首を斬られた其傍に JOHAN DECKER と云ふ署名がある。デッカーとは何者だか分らない階段を上つて行くと戸の入口に H. C. といふのがある。是も頭文字で誰やら見當がつかぬ。其から少し離れて大變綿密なのがある。先づ右の端に十字架を描いて心臓を飾り付け其脇に骸骨と紋章を彫り込んである。少し行くと楯の中に下の様

な句をかき入れたのが目につく。運命は空しく我をして心なき風に訴へしむ。時も
摧けよ。わが星は悲かれ、われにつれなかれ。次には、凡ての人を尊べ。衆生をいつくし
め。神を恐れよ。王を敬へ」とある。

斯んなものを書く人の心の中はどの様であつたらうと想像して見る。凡そ世の
中に何が苦しいと云つて所在のない程の苦しみはない。意識の内容に變化のない
程の苦しみはない。使へる身軀は目に見えぬ繩で縛られて動きのとれぬ程の苦し
みはない。生きるといふは活動して居るといふ事であるに、生きながら此活動を抑
へらるゝのは生といふ意味を奪はれたると同じ事で、その奪はれたを自覺する丈
が死よりも一層の苦痛である。此壁の周圍をかく迄に塗抹した人々は皆此死より
も辛い苦痛を嘗めたのである。忍ばるゝ限り堪へらる限りは此苦痛と戦つた末、居
ても起つてもたまらなく爲つた時始めて釘の折や鋭どき爪を利用して無事の内
に仕事を求め、太平の裏に不平を洩し、平地の上に波瀾を畫いたものであらう。彼等
が題せる一字一畫は、號泣、涕淚、其他凡て自然の許す限りの排悶的手段を盡したる
後猶飽く事を知らざる本能の要求に餘儀なくせられたる結果であらう。

又想像して見る。生れて來た以上は生きねばならぬ。敢て死を怖るゝとは云はず
只生きねばならぬ。生きねばならぬと云ふは耶蘇孔子以前の道で、又耶蘇孔子以後

の道である。何の理窟も入らぬ、只生きたいから生きねばならぬのである。凡ての人は生きねばならぬ。此獄に繋がれたる人も亦此大道に従つて生きねばならなかつた。同時に彼等は死ぬべき運命を眼前に控へて居つた。如何にせば生き延びらるゝだらうかとは時々刻々彼等の胸裏に起る疑問であつた。一度び此室に入るものは必ず死ぬ。生きて天日を再び見たものは千人に一人しかない。彼等は遅かれ早かれ死なねばならぬ。去れど古今に亘る大真理は彼等に誨へて生きよと云ふ。飽く迄も生きよと云ふ。彼等は已を得ず。彼等の爪を磨いだ。尖がれる爪の先を以て堅き壁の上に一と書いた。一をかける後も眞理は古への如く生きよと呼く。飽く迄も生きよと呼く。彼等は剝がれたる爪の癒ゆるを待つて再び二とかいた。斧の刃に肉飛び骨摧ける明日を豫期した。彼等は冷やかなる壁の上に只一となり二となり線となり字となつて生きんと願つた。壁の上に残る横縦の疵は生を欲する執着の魂魄である。余が想像の糸を茲迄たぐつて來た時、室内の冷氣が一度に脊の毛穴から身の内に吹き込む様な感じがして覺えずぞつとした。さう思つて見ると何だか壁が濕つばい。指先で撫で、見るとぬらりと露にすべる。指先を見ると眞赤だ。壁の隅からばかり、と露の珠が垂れる。床の上を見ると其滴りの痕が鮮やかな紅の紋を不規則に連ねる。十六世紀の血がにじみ出したと思ふ。壁の奥の方から唸り聲さへ聞

える。唸り聲が段々と近くなると其が夜を洩るゝ凄い歌と變化する。こゝは地面の下に通ずる穴倉で其内には人が二人居る。鬼の國から吹き上げる風が石の壁の破れ目を通つて小やかなカンテラを煽るから只さへ暗い室の天井も四隅も煤色の油煙で渦卷いて動いて居る様に見える。幽かに聞えた歌の音は窖中に居る一人の聲に相違ない。歌の主は腕を高くまくつて、大きな斧を轆轤の砥石にかけて一生懸命に磨いで居る。其傍には一挺の斧が抛げ出してあるが、風の具合で其白い刃がぴかりぴかとり光る事がある。他の一人は腕組をした儘立つて砥の轉るのを見て居る。髻の中から顔が出て居て其半面をカンテラが照す。照された部分が泥だらけの仁參の様な色に見える。かう毎日の様に舟から送つて來ては、首斬り役も繁昌だなうと髻がいふ。左様さ、斧を磨ぐ丈でも骨が折れるはと歌の主が答える。是は脊の低い眼の凹んだ煤色の男である。昨日は美しいのをやつたなあと髻が惜しさうにいふ。いや顔は美しいが頸の骨は馬鹿に堅い女だつた御蔭で此通り刃が一分許りかけたとやけに轆轤を轉ばす。シュ〜と鳴る間から火花がピチ〜と出る。磨ぎ手は聲を張り揚げて歌ひ出す

切れぬ筈だよ女の頸は戀の恨みて刃が折れる。

シュ〜と鳴る音の外には聽えるものもない。カンテラの光りが風に煽られ

て磨ぎ手の右の頬を射る。煤の上に朱を流した様だ。あすは誰の番かなと稍ありて髯が質問する。あすは例の婆様の番さと平氣に答へる。

生へる白髪を浮氣が染める、首を斬られリや血が染める。

と高調子に歌ふ。シユくくく轆轤が轉ばる。ピチくくと火花が出る。アハ、もう善からうと斧を振り翳して灯影に刃を見る。婆様ぎりか、外に誰も居ないか」と髯が又問をかける。「それから例のがやられる」氣の毒な、もうやるか、可愛相になう」といへば氣の毒ぢやが仕方がないはと眞黒な天井を見て嘯く。

忽ち窘も首斬りもカンテラも一度に消えて余はポーシヤン塔の眞中に茫然と佇んで居る。ふと氣が付いて見ると傍に先刻鴉に麩麵をやりたいと云つた男の子が立つて居る。例の怪しい女ももの如くついて居る。男の子が壁を見て、あすこに犬がかいてあると驚いた様に云ふ。女は例の如く過去の權化と云ふべき程の屹とした口調で、犬ではありません。左りが熊、右が獅子でははダッドレー家の紋章ですと答へる。實の所余も犬か豚だと思つて居たのであるから、今此女の説明を聞いて益不思議な女だと思ふ。さう云へば今ダッドレーと云つたとき其言葉の内に何となく力が籠つて恰も已れの家名でも名乗つた如くに感ぜらるゝ。余は息を凝らし、二人を注視する。女は猶説明をつゞける。此紋章を刻んだ人はジョン、ダッドレー

です。恰もジョンは自分の兄弟の如き語調である。ジョンには四人の兄弟があつて、其兄弟が熊と獅子の周圍に刻み付けられてある草花でちやんと分ります。見ると成程四通りの花だか葉だかが油繪の枠の様に熊と獅子を取り巻いて彫つてある。こゝにあるのは Acorus 是は Ambrose の事です。こちらにあるのが Rose と Robert を代表するのです。下の方に忍冬が描いてありませう。忍冬は Honeysuckle だから Henry に當るのです。左りの上に塊つて居るのが Geranium 是は G………」と云つたぎり黙つて居る。見ると珊瑚の様な唇が電氣でも懸たかと思はれる迄にぶる／＼顫へて居る。蝮が鼠に向つたどきの舌の先の如くだ。しばらくすると女は此紋章の下に書き付けてある題辭を朗らかに誦した。

Yow that these beasts do wel behold and see,

May demne with ease wherefore here made they be,

Withe borders eke wherein

A brothers' names who list to seeche the ground.

女は此句を生れてから今日迄毎日日課として諳誦した様に一種の口調を以て誦し了つた。實を云ふと壁にある字は甚だ見悪い。余の如きものは首を捻つても一字も讀さうにない。余は益此女を怪しく思ふ。

氣味が悪くなつたから通り過ぎて先へ抜ける。銃眼のある角を出ると滅茶苦茶

に書き綴られた、模様だか文字だか分らない中に、正しき書で、小く「ジェーン」と書
てある。余は覺えず其前に立留まつた。英國の歴史を讀んだものでジェーン、グレイ
の名を知らぬ者はあるまい。又其薄命と無殘の最後に同情の涙を濺がぬ者はある
まい。ジェーンは義父と所天の野心の爲めに十八年の春秋を罪なくして惜氣もな
く刑場に賣つた。揉み躍られたる薔薇の葢より消え難き香の遠く立ちて今に至る迄
史を繙く者、をゆかしがらせる。希臘語を解し、プレートーを讀んで一代の碩學アスカ
ムをして舌を捲かしめたる逸事は、此詩趣ある人物を想見するの好材料として何
人の腦裏にも保存せらるゝであらう。余はジェーンの名の前に立留つたぎり動か
ない。動かないと云ふより寧ろ動けない。空想の幕は既にあいて居る。

始は兩方の眼が霞んで物が見えなくなる。やがて暗い中の一點にパツと火が點
ぜられる。其火が次第／＼に大きくなつて内に人が動いて居る様な心持ちがする。
次にそれが漸々明るくなつて丁度雙眼鏡の度を合せる様に判然と眼に映じて來
る。次に其景色が段々大きくなつて遠方から近づいて來る。氣がついて見ると真中
に若い女が座つて居る。右の端には男が立つて居る様だ。兩方共どこかで見えた様だ
など考へるうち、瞬たく間にズツと近づいて余から五六間先で果と停る。男は前に穴
倉の裏で歌をうたつて居た。眼の回んだ煤色をした、脊の低い奴だ。磨ぎすました斧

を左手に突いて腰に八寸程の短刀をぶら下げて身構へて立つて居る余は覺えずギョットする。女は白き手巾で目隠しをして兩の手で首を載せる臺を探す様な風情に見える。首を載せる臺は日本の榎割臺位の大きさを前についで居る。臺の前部に藁が散らしてあるのは流れる血を防ぐ要領と見えた。背後の壁にもたれて二三人の女が泣き崩れて居る。侍女でもあらうか。白い毛裏を折り返した法衣を裾長く引く坊さんが、うつ向いて女の手を臺の方角へ導いてやる。女は雪の如く白い服を着けて、肩にあまる金色の髪を時々雲の様に揺らす。ふと其顔を見ると驚いた。眼こそ見えぬ、眉の形細き面、なやかなる頸の邊りに至迄、先刻見た女其儘である。思はず馳け寄らうとしたが足が縮んで一步も前へ出る事が出来ぬ。女は漸く首斬り臺を探り當て、兩の手をかける唇がむつくと動く。最前男の子にダツドレーの紋章を説明した時と寸分違はぬ。やがて首を少し傾けて、わが夫ギルドフォード、ダツドレーは既に神の國に行つてか」と聞く。肩を揺り越した一握りの髪が軽くうねりを打つ。坊さんは、知り申さぬ」と答へて、まだ真との道に入り玉ふ心はなしか」と問ふ。女屹として、まことゝは吾と吾夫の信ずる道をこそ言へ。御身達の道は迷ひの道、誤りの道よ」と返す。坊さんは何にも言はずに居る。女は稍落ち付いた調子で「吾夫が先なら追付う、後ならば誘ふて行かう。正しき神の國に、正しき道を踏んで行

かうと云ひ終つて落つるが如く首を臺の上に投げかける。眼の凹んだ、煤色の脊の低い首斬り役が重た氣に斧をエイと取り直す。余の洋袴の膝に二三點の血が迸しると思つたら、凡ての光景が忽然と消え失せた。

あたりを見廻はすと男の子を連れた女はどこへ行つたか影さへ見えない。狐に化かされた様な顔をして茫然と塔を出る。歸り道に又鐘塔の下を通つたら高い窓からガイフオークスが稻妻の様な顔を一寸出した。今一時間早かつたら……此三本のマツチが役に立たなかつたのは實に残念である」と云ふ聲さへ聞えた。自分ながら少々氣が變だと思つてそこへ塔を出る。塔橋を渡つて後ろを顧みたら、北の國の例か此日もいつの間にか雨となつて居た。糖粒を針の目からこぼす様な細かいのが満都の紅塵と煤煙を溶かして濛々と天地を鎖す裏に地獄の影の様にぬつと見上げられたのは倫敦塔であつた。

無我夢中に宿に着いて、主人に今日は塔を見物して來たと話したら、主人が鴉が五羽居たでせうと云ふ。おや此主人もあの女の親類かなと内心大に驚ろくと主人は笑ひながら、あれは奉納の鴉です。昔しからあすこに飼つて居るので、一羽でも數が不足するとすぐあとをこしらへます。夫だからあの鴉はいつでも五羽に限つて居ます」と手もなく説明するので、余の空想の一半は倫敦塔を見た其日のうちに打

ち壞はされて仕舞つた。余は又主人に壁の題辭の事を話すと、主人は無造作に「え、あの落書ですか、詰らない事をしたもんで、切角奇麗な所を大なしにして仕舞ひましたねえ、なに罪人の落書だなんて當になつたもんぢやありません、賈も大分ありまさあね」と濟ましたものである。余は最後に美しい婦人に逢つた事と其婦人が我々の知らない事や到底讀めない字句をすらく讀んだ事杯を不思議さうに話し出すと、主人は大に輕蔑した口調で「そりあ當り前でさあ皆んなあすこへ行く時にや案内記を讀んで出掛るんでさあ、其位の事を知つてたつて何も驚くにやあたらないてせう、何頗る別嬪だつて、倫敦にや大分別嬪が居ますよ、少し氣を付けないと險吞ですぜ」と飛んだ所へ火の手が揚る。是で余の空想の後半が又打ち壞はされる。主人は二十世紀の倫敦人である。

夫からは人と倫敦塔の話しをしない事に極めた。又再び見物に行かない事に極めた。

此篇は事實らしく書き流してあるが、實の所過半想像的の文字であるから、見る人は其心で讀まれん事を希望する、塔の歴史に關して時々戯曲的に面白さうな事柄を撰んで綴り込んで見たが、甘く行かぬので所々不自然の痕迹が見えるのは已を得ない。其中エリザベス(エドワード四世の妃)が幽閉中の二王子に逢ひに来る場と、二王子を殺した刺客の述懐の場は沙翁の歴史劇リチャード三世のうちにもある。沙翁はクラ

レンス公爵の塔中で殺さるゝ場を寫すには正筆を用い、王子を絞殺する模様をあらすには仄筆を使つて、刺客の語を藉り裏面から其様子を描出して居る。嘗て此劇を讀んだとき、其所を大に面白く感じた事があるから、今其趣向を其儘用いて見た。然し對話の内容周囲の光景等は無論余の空想から捏出したもので沙翁とは何等の關係もない。夫から斷頭吏の歌をうたつて斧を磨ぐ所に就いて一言して置くが、此趣向は全く「エーンズウオース」の倫敦塔と云ふ小説から來たもので、余は之に對して些少の創意をも要求する權利はない。「エーンズウオース」には斧の刃のこぼれたのをソルスベリ伯爵夫人を斬る時の出來事の様叙してある。余が此書を讀んだとき斷頭場を用うる斧の刃のこぼれたのを首斬り役が磨いて居る景色杯は僅に一二頁に足らぬ所ではあるが非常に面白いと感じた。加之磨きながら亂暴な歌を平氣でうたつて居ると云ふ事が、同じく十五六分の所作ではあるが、全篇を活動せしむるに足る程の戲曲的出來事だと深く興味を覺えたので今其趣向其儘を踏襲したのである。但し歌の意味も文句も、二吏の對話も、暗響の光景も一切趣向以外の事は余の空想から成つたものである。序でだから「エーンズウオース」が獄門役に歌はせた歌を紹介して置かう。

The axe was sharp, and heavy as lead,

As it touched the neck, off went the head!

Why-why-why-why!

Queen Anne laid her white throat upon the block,

Quietly waiting the fatal shock;

The axe it severed it right in twain,

And so quick—so true—that she felt no pain!

Whit-ah-ah-ah-ah!

Salisbury's countess, she would not die

As a proud dame should—decorously.

Lifting my axe, I split her skull,

And the edge since then has been notched and dull,

Whit-ah-ah-ah-ah!

Queen Catherine Howard gave me a fee—

A chain of gold—to die easily;

And her costly present she did not rue,

For I touched her head-and away it flew!

Whit-ah-ah-ah-ah!

此全章を譯さうと思つたが到底思ふ様に行かないし、且餘り長過ぎる恐れがあるから已めにした。

二王子幽閉の場とジエーン所刑の場に就ては有名なるドラロツシの繪畫が尠からず余の想像を助けて居る事を一言して聊か感謝の意を表する。

舟より上る囚人のうちワイアットあるは有名なる詩人の子にてジエーンの爲め兵を擧げたる人、父子同名なる故紛れ易ひから記して置く。

塔中四邊の風致景物を今少し精細に寫す方が讀者に塔其物を紹介して其地を踏ましむる思ひを自然に引き起させる上に於て必要な條件とは氣が付いて居るが、何分かゝる文を草する目的で遊覽した譯てはないし、且年月が経過して居るから判然たる景色がどうしても眼の前にあらはれ悪い。従つて稍ともすると主觀的の句が重複

して、ある時は讀者に不愉快な感じを與へはせぬかと思ふ所もあるが右の次第だから仕方がない。
(三十七年十二月二十日)

ファウストに表はれたるゲーテの哲學的思想

木山熊次郎

目次

一、序言……………二、ファウストの略筋……………三、ファウストを一貫せる問題……………四、何に由つて眞理を知り得る乎……………五、如何なる意義に於て眞理を知り得る乎……………六、美に對する觀念……………七、國家觀……………八、倫理的思想……………九、宗教的思想……………十、結論

一、序言

ゲーテ自身が嘗て云へるが如く、詩人の作は皆それぞれに其詩人を表現するものなりとせば、ファウストはゲーテ自身を表現するものならざらんや。ゲーテの詩作の事に従ふや、彼れは敢て決して時好に投ずるを爲さず、常に斷乎なる藝術的良心を保持して其包懷する所を之に托す。吾人は斯くの如き意味に於て、彼を稱して最も主觀的なる詩人と爲さんと欲す。而してファウストは彼れが一生の心血を注ぎし